

特 集 儀礼の変容

---

# パンデミック下の視覚表象と信仰

—アマビエ・マスク地藏・大仏の事例から—

---

君島彩子<sup>1</sup>

本稿では2020年の春以降COVID-19の流行によって一躍注目されたアマビエ、同じく感染症拡大の中で広まったマスクを着用した地藏、そして感染症の収束を願う大仏を対象に、パンデミック下で新たに定着した視覚表象における信仰のかたちを検討した。

---

<sup>1</sup> きみしまあやこ：日本学術振興会特別研究員

## はじめに

新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19）によるパンデミックによってアマビエ、マスク地蔵、大仏といった視覚表象が感染症の収束を願うシンボルとしてインターネットや報道を通して広まった。在宅による仕事や学習によりオンラインが重視されるようになったこともあり、ソーシャル・ネットワーキング・サービス（SNS）<sup>1)</sup>などのオンライン上のつながりの比重が高まったことも、アマビエ、マスク地蔵、大仏の視覚表象が広まる要因となった。しかし、これらの視覚表象はオンライン上に留まらない現実社会との接点ももつものである。このため本稿では立体造形物を中心に考察をおこなう。

デジタルツールを用いたイラストなどの創作、スマートフォンを用いたデジタル写真の撮影など、現代における平面の視覚表象はプロでなくても容易に創作が可能である。さらにSNSを用いることで創作物の発表も容易となっている。対して立体物は現実存在していることが前提となる。立体物も写真で撮影することによりインターネット上で共有することが可能であるが、必ずオリジナルが現実の空間に存在している。オンライン上のコミュニケーションが重視されるパンデミック下において、人々は現実世界の立体造形物にどのような思いを託したのか、そしてマスメディアやSNSを通して視覚表象はどのように共有されたのかを論じる。

## 1、コロナ禍を代表するキャラクター「アマビエ」

### 1-1 SNSで拡散されたアマビエ

COVID-19によって最も流通した視覚表象は「アマビエ」であると言えるだろう。アマビエの図像が描かれている唯一の資料は、京都大学附属図書館所蔵の瓦版である。肥後国（現・熊本県）の海中に毎夜光るのが出るので土地の役人がおもむいたところ、アマビエと名乗るものが出現し、役人に対して「当年より6ヶ年の間は諸国で豊作となるでしよ

う。しかし同時に病も流行します、早々に私の姿を描き写して人々に見せなさい<sup>2)</sup>と予言めいたことを告げ、海の中へと帰って行ったとされる。文中に「弘化三年(1846)」とあるので、それ以降に刊行されたのは間違いない。だが、この瓦版以降にアマビエについて記載したものは未だに発見されていない<sup>3)</sup>。近代以降も水木しげるが図像化し、テレビアニメ『ゲゲゲの鬼太郎』にも登場するなど妖怪愛好者には知られている存在ではあったが、誰もが知る存在にアマビエがなったのは2020年春である。

TwitterをはじめとしたSNSによって拡散されアマビエが大流行した。2020年2月27日、妖怪を題材とした掛け軸を制作している作家「大蛇堂」がTwitterで自作のアマビエの図像と「流行り病がでたら対策のためにわたしの姿を描いて人々にみせるように」というエピソードを紹介したことがCOVID-19流行後の初出とされる。これをきっかけに妖怪愛好者たちの間で徐々に自作のアマビエ投稿が増え、3月3日に妖怪イベント企画団体である「妖店百貨展」が京都大学附属図書館所蔵の瓦版のアマビエ画像をTwitterに投稿した。この投稿が数多くリツイートされたことで、アマビエ画像が多くの人の目に触れるようになった。さらに3月6日、瓦版のアマビエ画像を見た漫画家のトキワセイイチが漫画作品「アマビエが来る」を複数のSNSに投稿、疫病の流行とアマビエを描く行為が結び付けられるかたちで広く認知されるようになった<sup>4)</sup>。

漫画「アマビエが来る」の投稿直後から「アマビエ」や「アマビエチャレンジ」といったハッシュタグをつけた自作のアマビエのイラストがTwitterやInstagramをはじめとするSNSに数多く投稿されるようになった。漫画家やイラストレーターなどのプロのみならず、久しぶりに絵を描いたという人や小学生など多様な人々がアマビエの姿を描いている。また数日後には毛糸などを編んだ「あみぐるみ」やフェルトを用いた「ぬいぐるみ」などアマビエは立体化されるようになった。さらには自らがアマビエに扮する者やペットにアマビエのコスチュームを着せる者まで現れた。

4月に入ると厚生労働省が公開した感染予防啓発アイコンにもアマビ

エが使用された。厚生労働省のアマビエの図像は、瓦版の図像に準じるものであるが左右が逆転している点でオリジナルのイラストとなった。つまり最初のTwitterへの投稿からわずか1ヶ月半ほどで行政がアイコンに使用するまでアマビエは知名度をあげたのである。

アマビエの造形は、鳥のようなクチバシ、頭部から伸びる長い毛、体部の鱗、3本の尾ビレという非常にわかりやすい要素で構成されていたため、誰もがその姿を表現することが可能であった。妖怪の研究者・蒐集家である湯本豪一や歴史研究者の長野栄俊が指摘するようにアマビエは、猿の胴体をもつ予言獣アマビコの誤記であるとされ、また魚の胴体は同じく予言獣として流布していた人魚のイメージが反映されているとされる<sup>5)</sup>。同じように疫病を予言するアマビコや人魚はアマビエと比べてグロテスクなものが多い。疫病と結び付けられた伝承をもちながら、現代的な感覚における「かわいい」とあう造形によってアマビエは多くの人々から支持されたのである。

## 1-2 アマビエのひろがり

5月にはSNSで拡散されたアマビエの作品を集めた『みんなのアマビエ』（扶桑社）も出版されるなど、オリジナルが1枚の瓦版のみであるからこそ、作者ごとの個性によって様々な造形作品が生み出された。日本では「ゆるキャラ」に代表されるように個別の地域や事象と結びついたキャラクターが多数存在しているが、アマビエにおいては多くの人々がキャラクターを受容するだけでなく、制作者として発信者となった点が新しかった。さらに在宅の時間が増えたことでイラストを描いたり、あみぐるみを編むなどの時間が生まれ、アマビエのイラストや写真がSNSを通して発信されオンライン上での新たな交流も生まれた。視覚表象だけでなくSNS上での流通も含めてアマビエはCOVID-19の流行を象徴するキャラクターとなったと言えるであろう。

アマビエが定着すると、企業によってアマビエを用いた商品が次々と発売された。菓子や酒などの食品のパッケージや風呂敷やTシャツなどの布製品、こけしやだるまなどの民芸品、そして9月には日本航空に

よってアマビエをあしらった飛行機が飛ぶなど、あらゆる産業にアマビエが使用されるようになった。大手広告代理店がアマビエの商標登録を出願した際には「アマビエは誰のものでもない」などとして反対する意見がSNS上で拡散し、最終的には申請が取り下げられた。また菓子メーカーも商標登録を出願したが、これに対して特許庁は「新型コロナウイルス感染拡大の収束祈願の象徴としてアマビエはすでに広く使用されている」として申請を却下している。こうして1枚の瓦版の図像をもとに広がったアマビエは、特定の団体や個人に帰属することなく自由な視覚表象として定着した。つまりパンダや猫と同じように個々のキャラクター化が可能となったのである。

子どもの文化政策を専門とする松本玲子が指摘しているようにアマビエのイメージは大人から子どもたちへと浸透し、疫病流行中に子ども達が自ら楽しむためにアマビエの二次創作がおこなわれた<sup>6)</sup>。休校や休園によって自宅に居ることを余儀なくされている子ども達のために、「アマビエぬりえ」を制作し、自社サイトから無料でダウンロードできるようにした企業やアマビエを題材にした教材資料の開発もおこなわれている。7月には茨城県土浦市で地域独自のアマビエデザインを市内の年長児から募集し商業施設等に展示するイベントが開催され、500点以上の作品が集まっている。「ステイ・ホーム (stay home)」の呼びかけの中で、子ども達が楽しみながら過ごすためのツールとしてアマビエは活用された。アマビエを用いたワークショップやイベントは未就学児から高校生までを対象に全国各地で様々なかたちで開催された。このようなイベントで制作されたアマビエはカラフルな色彩をほどこされたものが多く、大人と同様に子供もアマビエの創作を楽しんだと言えるであろう。

### 1-3 アマビエにおける信仰

アマビエは明確な信仰体系をもつものではなく、さらに瓦版からはアマビエの絵を描くことによって疫病が鎮まるというところまでを読み解くことはできない。だがアマビエのイメージがこれだけ広まった背景には「COVID-19が早く収束してほしい」という思いがあるのは間違いない。

そして信仰体系をもたないがゆえに既存の宗教団体がアマビエを利用することも容易であった。SNSを通じてアマビエが全国に知られるようになった2020年春、複数の神社、寺院がアマビエの図案を描いた御朱印の授与を開始し、その様子がまたSNSによって拡散されるようになった。近年の御朱印ブームもあり、工夫をこらした御朱印を行っている寺社は多かったことも、いちはやくアマビエの御朱印がだされる背景となった。また3月末には印章専門店が瓦版の図案を用いて御朱印用のアマビエ印を発売したことの影響もあるだろう。そして4月にはいるとアマビエのお守り、絵馬、おみくじなどアマビエのイメージが様々なかたちで用いられるようになった。

御朱印のような平面の図像だけでなく立体像のアマビエが寺院へ奉納された事例も報道されている。「猫寺」として知られる山口県萩市吉部上の雲林寺の山門前に、チェーンソーアートを手がける林隆雄が丸太から掘り出した猫の顔をもつアマビエの木像を奉納した。林は「見た人が新型コロナウイルスの感染拡大防止の意識を高めてくれれば」と期待を込めて制作したという<sup>7)</sup>。栃木県足利市の徳正寺には仏像彫刻を趣味で行っている、山口千二が制作した木製のアマビエが奉納されている。山口は、アマビエ像を見て「マスクをしよう」、「手を洗おう」としてもらえたらいいと述べている<sup>8)</sup>。この2つの事例はいずれも感染拡大の防止の啓発として寺院に奉納されたものである。

さらに宮城県大崎市の洞川院では、住職と檀信徒が力をあわせ高さ2.2メートル、重さ約2トンの巨大なアマビエ像を約1ヶ月かけて制作している。このアマビエ像は心入れ式を行っているが、住職は「見る人も笑顔になってほしい」と述べており<sup>9)</sup>、アマビエが広がるきっかけとなった「創作と鑑賞の楽しみ」が強調されるものとなっている(図1)。

神や仏ではないアマビエを従来の信仰体系の中に位置づけるのは難しいが、岩手県奥州市の光明寺では、住職が仏師石川昇明に制作を依頼しアマビエをイメージした菩薩像が設置されている。可愛らしいアマビエの像が多い中で光明寺の像は、秋葉大権現から着想を得て、見る者の姿をうかがうような険しい表情が特徴となっている<sup>10)</sup>。これまでのアマビ



図1 巨大アマビエ（2020年7月6日河北新報掲載「コロナ収束や観光の再生 巨大アマビエに願い込め、宮城・鳴子温泉の住職が制作」より 河北新報社提供）

エの事例とは異なり明確に疫病の収束を願い仏師によってアマビエの像が制作されたものである。ただし、須弥壇などではなく玄関に安置されていることから感染症予防を呼びかける意味もあった。さらに北海道名寄市の崇賢寺では、光明寺のアマビエ菩薩をもとにした札を作成している<sup>11)</sup>。この札も光明寺の住職による祈祷がおこなわれており、同寺院を中心に仏教儀礼の中にアマビエのイメージが取り込まれている。だがアマビエを菩薩と位置づける光明寺の取り組みは全国的に見て珍しい事例である。

#### 1-4 オンラインからプライベートの空間へ

筆者自身も外出を控えていたため現地調査をする機会は少なかった

が、外出した際に窓辺にアマビエを飾っている住宅やショーウィンドウにアマビエの絵やマスコットを飾っている店舗をいくつも見かけた。さらに筆者の実家にも元図工教諭の母によって描かれたアマビエの絵が飾られていた。アマビエは個人が所有しているものが多いため全体像を捉えることは難しいが、アマビエに関係する商品がこれだけ発売されていることに鑑みれば、何らかのかたちでアマビエが飾られた家や商店は多いのではないかと予想される。

自作による絵や粘土や布などで作られた「手作りのもの」や、民芸品などを飾ることが日本には根付いていることも、アマビエが生活空間に飾られた背景としてあるだろう。「アマビエこけし」や「アマビエだるま」が発売されていることから明らかであるように、身近な「縁起物」としてアマビエはプライベート空間に入り込んだのである。また持ち歩くことのできるマスコット類にも手作り、商品問わずアマビエが用いられた。目に見えないウィルスの恐怖と収束への願いがアマビエというかたちになったのである。このような多数のアマビエ像の存在を鑑みれば、寺院におけるアマビエ像の安置もプライベート空間の発展として捉えることが妥当であろう。

未知の伝染病を前にインターネットと個々の創作意欲が結びつき短期間に大流行したアマビエは、現代の「流行神」と言えるのかもしれない。流行神であればCOVID-19の収束とともに忘れられる存在となるだろう。だがキャラクターとして定着したアマビエが感染症とは異なる意味付けによって定着する可能性もある。すでに赤坂警察署が「火災予防祈願」のポスターにアマビエのイラストを用いているなどの事例もあり、その役割も広がっていくのかもしれない。

## 2、マスク地蔵の全国的流行

### 2-1 マスクをつけた銅像やキャラクターの広がり

アマビエと同様にCOVID-19の流行によって一気に定着した視覚表象のひとつが「マスク姿」である。新型コロナウイルスが国内で確認さ



れた2020年2月以降、自宅外ではマスクを着用することが生活様式として定着している。当初はマスクが不足していたこともあり、手作りのマスクも流行した。

やがて町中の銅像や店頭に置かれたキャラクターにもマスクを着用したものがSNSなどにも投稿されるようになった<sup>12)</sup>。当初の投稿を見ると誰かがイタズラで道端に落ちていたマスクを付けたものと疑われる事例も多い。例えば東京都渋谷駅前のハチ公像は数回にわたりマスク姿にされ、関係者が見つけるたびに外しており、5月に入るとハチ公にマスクをつけなよと呼びかけられるようになった<sup>13)</sup>。一方で千葉県流山市ではビリケンの石像に奉納されたマスクが何者かによって盗まれたとの報道もあり<sup>14)</sup>、マスクが不足した時期の混乱も伺わせる。

像にマスクを着けたのが誰であるか分からない場合には、善意なのかイタズラなのか判断することが難しい。だが設置者が自らマスクを着用させるケースが報道されるようになることで状況が変化する。4月3日には札幌市の真駒内滝野霊園内に設置されたモアイ像5体がビニールシートで作られた巨大なマスク姿で感染症予防を訴えたことが報道された<sup>15)</sup>。また4月28日には岐阜市が、JR岐阜駅前の織田信長像に美濃和紙のマスクを着け、不要不急の外出自粛や人と人との距離を保つように訴えている<sup>16)</sup>。モアイ像や織田信長像の事例が全国的に大きく報道されたこともあり、その後各地で感染症予防を訴えるために偉人などの人物像、狛犬などの動物像、ゆるキャラやアニメなどのキャラクター像にマスクを着用させる事例が増えた。

同時期に寺院の境内などに建立された地蔵などの仏像もマスクが着けられるようになった。SNSの投稿では3月中からマスクを着けた地蔵の姿が報告されているが、マスクを着用した地蔵が広く知られるようになったのは、4月2日の『朝日新聞』に掲載された静岡県三島市の田種寺の境内の12体の地蔵にマスクが着けられたという報道以降である。この記事につけられた写真は、マスクを着けた5体の地蔵、そして地蔵の足元には「コロナ」と書かれた塔婆が置かれ（下部は確認できず）、手をあわせるマスク姿の2人の少女を写している。少女の赤い服と地蔵の

赤い前掛けと頭巾が対応し、構図的にも完成された写真になっている(図2)。この地蔵につけられたマスクは3月初旬に檀家の70代女性が手作りして仕立てた。感染の収束を願うとともに行き交う人にマスクの着用を促す思いを込めたという。通学路沿いにあるため、子供たちが手を合わせたり、若者が写真に収めSNSに投稿するなど話題になっていた<sup>17)</sup>。

田種寺におけるマスク地蔵の報道以降、地蔵などの仏像にマスクを着けたというニュースが地方紙を中心に増えている。なおマスクをつけた像についての報道は2020年に集中している。2021年7月の『神戸新聞』に「いまさらマスクをした地蔵では記事にならんわな」<sup>18)</sup>という記者のコメントが載せられており、最初の『朝日新聞』の記事から約1年でマスク地蔵はニュースとしての価値がなくなるほど広く定着したことが分かる。筆者も2020年夏にかけて東京都江東区と大田区で手作りのマスクを着けた地蔵を確認している。また2021年夏には仙台市と山形市の寺院でマスクを着用した地蔵を確認していることから、報道される以外にもかなりの数のマスクを着用した仏像があったものと予想される。



図2 マスクをつけられた地蔵(2020年4月2日朝日新聞朝刊掲載「お地蔵さんもマスク、檀家手作り お守りに撮影する人も」より 朝日新聞社提供)

## 2-2 地蔵にマスクを奉納する理由

ではなぜ地蔵にマスクが着けられるのであろうか？ 近世から石の地蔵には前掛けや頭巾を奉納することは行われてきたが、マスクもまた奉納物のひとつのかたちであると言えるであろう。ただし路傍の地蔵などの場合、いつの間にかマスクが着けられていることが多く、どのような理由でマスクが奉納されたのかを知ることは難しい。このため本稿では新聞報道による奉納者や宗教者のインタビューから、どのような理由からマスクが着けられたのかを考察したい。

最初に大きく報道された田種寺のマスク地蔵は、COVID-19の収束を願うものでもあったが、報道では感染症予防を訴えることが強調された。同じく比較的早い時期の報道では仏像にマスクを着用させることで、感染症予防を強調しているものが多い。

群馬県伊勢崎市の同聚院で境内の六地蔵に、尼僧である副住職の着用を用いて信徒の女性が縫ったマスクが着けられたことが報道されている。住職は「お地藏様のように距離を取り、マスクをする心掛けが大切」と<sup>19)</sup>、一定の距離で6体並ぶ地蔵をソーシャルディスタンスになぞらえるとともに、マスクの着用を訴えている。青森県西津軽郡深浦町の円覚寺でも童地蔵に檀信徒が手作りしたマスクが奉納され、住職は「マスクをして人々に注意を呼び掛けているよう」と述べている<sup>20)</sup>。このような発言は参拝のため寺院を訪れる人々に感染症対策を訴えるものであるが、さらに福島県須賀川市の西藏寺では住職自ら六地蔵にマスクを着け「コロナ防疫や治療に専念している医療関係者に敬意を表しましょう」と呼びかけることで、COVID-19が広がるなかでのメッセージを発信している<sup>21)</sup>。

銅像やキャラクターと同様に感染症予防を訴えるために地蔵にマスクを着けたという報道は2020年5月ごろまで見られるが、マスク着用が定着して以降はCOVID-19の収束を願うという「祈りのかたち」としてマスク地蔵が広く報道されるようになった。

群馬県高崎市の仁叟寺ではCOVID-19の早期収束を願い檀信徒の女性が縫ったマスクが地蔵に着けられた。仁叟寺の住職は「コロナウイルス

が沈静化し、早く元の生活に戻って欲しいと願いを込めた」と語っている<sup>22)</sup>。三重県松阪市の墓地では地元の主婦が手作りしたマスクを10体の地蔵に着け、疫病の1日も早い収束を願った<sup>23)</sup>。青森県八戸市の常現寺では、地蔵のほか三十三観音などに檀信徒の女性が手作りしたマスクをつけた。マスクを縫った女性は「ウイルスから私達を守ってほしいと願いながら作った」と述べている<sup>24)</sup>。新潟県五泉市の栗島公園内に安置された約4メートルの子安延命地蔵尊には地域の婦人洋品店を営む女性が絹の反物を用いて縫ったマスクが着けられた。マスクを制作した女性は「見た目も荘厳で、疫病を退散してもらえそう」と述べている<sup>25)</sup>。

このようなCOVID-19収束を願うマスク地蔵の報道は2021年に入ってから確認できる。山形県米沢市の市李山に鎮座する舟坂安産地蔵尊では、地蔵を守る講中の女性が頭巾と共にマスクを縫い奉納した。マスクを奉納した女性は「コロナの早い終息をお願いしながら着替えをさせていただいた」と述べている<sup>26)</sup>。

2020年春にはマスク不足から女性を中心に布製のマスクを手作りする者が増えた。このような手作りマスクの広がりには地蔵をはじめとする仏像へのマスク奉納へとつながった。マスクの制作者は檀信徒や地域の女性を中心となっており、趣味として定着した手芸文化の発展としてマスク奉納がおこなわれたと言えるであろう。なおマスクが不足した時期には、新聞を読んだ読者からマスクがあるのであれば地蔵ではなく人間に回すべきだというクレームを受けた寺院もある<sup>27)</sup>。実際には地蔵用のマスクは小さく人間が使用できるものではなかったが、COVID-19による混乱とマスク地蔵の新聞報道の反響の大きさを裏付けるものと言えるだろう。

### 2-3 歴史的な疫病除け信仰とマスク

COVID-19が流行するなかで、天然痘やスペイン風邪など過去に猛威をふるった疫病の歴史についての報道も増え、そのような中で伝統的な疫病除けの信仰も注目された。栃木県宇都宮市では「黄ぶな」のように地域に根付いた視覚表象も見られる。黄ぶなは、黄色の胴体、赤い頭、

緑色の尾ビレ、黒の背ビレをもつふっくらとした鮎の張り子人形で、宇都宮市周辺では新年の縁起物として玄関や神棚に飾り無病息災が願われてきた。黄ぶなが飾られるようになった由来として天然痘が流行した際に宇都宮市の中心を流れる田川で釣り上げられた黄色いフナを子供に食べさせたところ、たちまち病気が治ったという伝説がある。このためCOVID-19が流行してからは黄ぶなをあしらった様々な商品が販売され、県外からも買い求める人が増えた<sup>28)</sup>。

地蔵に奉納されたマスクにも黄ぶながあしらわれた。7月22日から始まった政府の観光支援策「Go To トラベル」に合わせ、栃木県日光市の憾満ヶ淵に並ぶ約70体の「並び地蔵」に日光市女将の会と地蔵を所有する日光山輪王寺の関係者の手によってマスクが着けられた。このマスクは女将の手作りで、一部には黄ぶなの刺繍が施された。マスクをつけた女将は「感染防止をしながら、日光の旅行を楽しんでいただきたいとの思いを込めた」と述べており<sup>29)</sup>、地蔵にマスクを付けることで観光客の誘致を願うとともに、COVID-19の収束を願ったのである。

黄ぶなは栃木県における地域性の強い信仰であるが、より全国的な広がりを見せたのが赤いマスクの奉納である。地蔵をはじめとする石仏に対して赤い前掛けを奉納することは全国的に行われている。いつ頃からこの風習が始まったのかは定かではないが、幕末に刊行された河鍋暁斎による浮世絵《地蔵の顔も三度なずれば腹をたつ》には、赤い前掛けをした石の地蔵がユーモラスに描かれていることから近世にはその信仰が広まっていたことが理解できる。「赤色」には魔除けの効果が期待され、天然痘避けとして飾られた「赤絵」「疱瘡絵」などと同様に赤色には疫病をはじめとする災いを除ける力があると信じられてきた。地蔵に対しても赤い前掛けを奉納するだけでなく、魔除けとして地蔵の顔や身体をベンガラなどで赤く彩色する「赤地蔵」も各地に伝わっている。赤いマスクは奉納物として定着した赤い前掛けのイメージを引き継ぐことで、全国各地へ広がった。

仏像へのマスク奉納が広がった2020年4月末、岐阜県土岐市の肥田瀧が洞石仏保存会は、COVID-19の早期収束を願い、赤い布製の手作り

の「願掛けマスク」を、複数の石仏や磨崖仏に献納した。保存会の代表者は願掛けマスクについて「こんな状況なので、マスクの献納などは、やめた方が良いという意見があることも、重々承知している」としながらも、「新型コロナウイルスの早期終息を祈願し、ほかの地域でも願掛けマスクの献納が広がってほしい」と述べている<sup>30)</sup>。ここでは赤いマスクの奉納が「願掛け」という信仰体系の中で捉えられていることが理解できる。

一方でCOVID-19が流行するなかで人との接触を遠慮する動きも見られた。石川県金沢市の雨宝院では、住職あてにも手作りの赤いマスクがポストに届けられ、後に檀家の女性からは「こんな時期なので、声を掛けずにそっと届けておきました」との連絡があったという。道路沿いの六地蔵に着けられたそろいの赤いマスクは、COVID-19の収束を願うとともに「愛らしい様子が、道行く人々を和ませている」と報道されている<sup>31)</sup>。地蔵の装飾としても定着した赤い前掛けや帽子と同様に、赤いマスクは疫病除けの伝統を引き継ぎつつも「やすらぎ」を与える存在でもあったのである。後述するように地蔵には他の尊格の仏像以上に身近な愛着心が持たれることが多かったことが、マスク奉納へとつながった。

マスク供給に関する報道が一段落ついた2020年7月以降も、赤いマスクを着けた地蔵の様子が報道されている。石川県白山市の舟岡山墓地では地域の商工会女性部が12体の地蔵に赤いマスクを取り付けた。商工会では例年、前垂れと帽子を奉納し続けてきたが、新たに赤いマスクが加わったものである<sup>32)</sup>。また山形県村山市の蓮化寺では本堂内に安置された延命地蔵菩薩に赤いマスクを奉納し、COVID-19の収束を願う法要をおこなっている。法要をおこなった住職は「地蔵にお祈りすることは現世のご利益がある。新型コロナウイルスをここで食い止めようと思いを込めた」という<sup>33)</sup>。

さらに多数の地蔵に赤いマスクがつけられることで映像としても目を引くものとなった。群馬県甘楽郡甘楽町の向陽寺では約60体の地蔵に手作りの赤いマスクが着けられた<sup>34)</sup>。また福島県大沼郡の会津薬師寺では、108体の地蔵に、赤い帽子と前掛けと共に赤いマスクがつけられる



図3 赤いマスクを着けた108体の地蔵(会津薬師寺にて筆者撮影)

行事が行われている(図3)。これは住職による発案で、檀家たちが手作りの布製のマスクをかけたものである<sup>35)</sup>。会津薬師寺においては108体という多数の地蔵が赤いマスクを着ける姿映像として映えるものでもあり、全国的にニュース番組で報道されたほか、SNSなどを通じてその姿は拡散された。そして2021年8月にも再び108体の地蔵に赤いマスクの奉納がおこなわれ、住職は「今年もマスクをかけることになるとは思わなかった。一刻も早く外せる日が来ることを願う」と述べている<sup>36)</sup>。赤いマスクは前掛けや帽子とは異なりCOVID-19が収束し、マスクを外して生活ができるようになった時にはおそらく消えていくCOVID-19の流行下における願掛けなのだ。

#### 2-4 マスク地蔵の可愛らしさと癒し効果

地蔵に対する帽子や前掛けなどの奉納は、疱瘡除けや魔除けなどの影響が推測されるものの、明確な信仰体系によって規定されるものではない。むしろ前近代から子供の姿と重ねられてきた地蔵への愛着によって帽子や前掛けが奉納された部分も大きい。人形文化研究者である菊地浩平が指摘しているように、日本人のぬいぐるみに対する愛着心には地蔵信仰との類似性がみられる<sup>37)</sup>。装身具を手作りし着せる行為も愛着から

くるものであろう。このような地蔵に対する愛着心もまたマスクが奉納される要因となったと考えられる。

例えば、福島県伊達市の高福寺では COVID-19 が収束することを願って檀信徒が作ったピンクの花柄のマスクが奉納されている<sup>38)</sup>。このような可愛らしいマスクが選ばれたのも、地蔵ならではであろう。秋田市の麟勝院では境内の六地蔵に、檀信徒が編んだニット帽とともにマスクが奉納され、住職も「お地蔵さまには暖かくして冬を越えて欲しい」と語っている。また埼玉県さいたま市の宝泉寺では、地域の女性が 2015 年から境内の六地蔵に手作りの子供服を奉納してきたが、2020 年 6 月には色鮮やかな手作りマスクも加えられた。マスクを奉納した女性は「地蔵様にこの地域を、いつまでも温かく見守ってもらいたい」と述べている<sup>39)</sup>。

長野県諏訪市の法光寺では「ともいき地蔵尊」と呼ばれる童子の姿をした地蔵に水玉などの柄のマスクが奉納されている。同寺の住職は「自粛で息苦しい世の中、ひとときの癒しと安らぎを感じてもらえたら」と述べており<sup>40)</sup>、マスク姿の地蔵に愛着をもつことで癒しの効果を得られるものであったと言えるであろう。山梨市の竜泉寺においても六地蔵にマスクが奉納されており、住職は「地蔵を見てほっこりした気持ちになればうれしい」と語っている<sup>41)</sup>。2000 年代以降には頭部が大きく幼い表情でより子供に近い姿の「童地蔵」も流行している。このような流行からも理解できるように、COVID-19 によって息苦しさが増す中、マスク地蔵の姿に癒やしが求められたのである。

大人だけでなく子供たちも地蔵に対する愛着心を持っている。神奈川県秦野市の鶴巻温泉駅前には「延命くん」と呼ばれる延命地蔵尊が建立されている。この地蔵を管理する商店会の会長の元を訪れた近隣の園児らが「お地蔵様にマスクをしてあげてもいいですか?」と尋ねたことがきっかけとなり、園児の手によって花柄やチェックの布をつなぎ合わせた大きなマスクが作られ、地蔵に着けられた<sup>42)</sup>。そして園児達で作ったマスクは地蔵の顔全体を覆うほど大きい、その稚拙さも含めマスク地蔵が周囲の人々へ癒しの効果があったものと考えられる。



東日本大震災後に建立され子供たちに親しまれた地蔵にもマスクが着けられている。宮城県気仙沼市に、東日本大震災で住民に避難を呼びかけていて津波に巻き込まれ殉職した大谷駐在所の警部をしのぶ地蔵が建立されている。通学路に建つ地蔵に手を合わせる児童も多い。2020年8月にはこの地蔵に住民の手によって白いマスクが着けられたことが報道された<sup>43)</sup>。さらに12月には同年ヒットした漫画・アニメ『鬼滅の刃』の主人公が身につけている着物と同じ黒と緑の市松模様の前掛けとマスクが新調されている。『鬼滅の刃』にちなんだ装いとなった地蔵に対して、住民は「コロナという鬼をやっつけて欲しいと」と述べており<sup>44)</sup>、疫病退散の祈りにもキャラクターのイメージが反映されている。子供たちもマスクを着用しなければいけないなかで、『鬼滅の刃』にちなんだ和柄マスクが流行した。さらに週刊誌によって市松模様を始めとする和柄の有する厄除け的な意味合いが報道されたことは<sup>45)</sup>、赤いマスクや黄ぶなのマスクと同様に、歴史的な意味付けがおこなわれたとも捉えられる。

## 2-5 地域社会におけるマスク地蔵の役割

アマビエほどではないものの各地の報道によってマスク地蔵がすっかり定着したことは、最初からマスクを着用した姿のマスク地蔵が制作されるようになったことから伺える。神奈川県川崎市の浄慶寺には石工・佐藤友昭によって彫られたマスク姿の地蔵が安置され<sup>46)</sup>、また山梨県甲府市の恵林寺に木彫の「マスク地蔵尊」が奉安されている。いずれも石や木を彫りマスク姿を表現しており、この先もマスク姿の地蔵として寺院内に安置されていくことになるのである。さらに2021年3月には岡山市内では「日限地蔵」で知られる大雲寺で祈祷された、地蔵の描かれた大きなマスクがバスの前面につけられたとの報道もあり、地蔵とマスクのイメージが結びついたことが理解できる<sup>47)</sup>。

地蔵はそれぞれの地域コミュニティに根付いているものが多く、マスク地蔵も地域のシンボルとなるものであった。兵庫県神戸市には首から上だけが残された高さ80センチメートルの「くび地蔵」が残されているが、この地蔵にも地元住民の手で大きなマスクが着けられた。地蔵奉賛

会の代表の女性は「いつも地域を見守ってくれている。新型コロナもお地蔵さんとともに乗り越えたい」と語っており、マスク地蔵は地域のシンボルとしての意味を見いだされた。

地蔵へマスクを奉納する行為は地域における人と人のつながりを再構築することへもつながったようである。石川県金沢市の祥瑞寺付近の県道にある9体の地蔵に町内のお年寄りの有志が手作りのマスクを奉納することで交流を広げたことが報道されている<sup>48)</sup>。そして青森県黒石市の身代わり地蔵の祠ではCOVID-19の収束を願い地域の女性が念仏を唱えながら巨大な数珠を回す「百万遍」とともに地蔵にマスクが奉納されたことが報道されている<sup>49)</sup>。地域のつながりや伝統行事の次世代継承を願う中でマスク地蔵が取り入れられたと言えるであろう。

当初は他の銅像やキャラクターへの奉納と同様にマスクの着用を呼びかける目的で地蔵にマスクが着けられたという報道が目立ったが、しだいにCOVID-19の収束を祈る「奉納」としての要素が強まった。地蔵に対する心遣いは、「お地蔵さんがかわいそう」という説話『笠地蔵』のような思いやりのきもちからくるものである。さらに地蔵に優しくすることで幸福がもたらされるという現世利益信仰としての側面もあるだろう。また手作りのマスクを奉納することにより「癒やし」の効果も得られたようである。そして疱瘡除けの信仰ともつながる赤いマスクや栃木県下で疫病除けの信仰対象となっている黄ぶなを刺繍したマスクなど、マスクの奉納は過去の疫病除け信仰とつながった。

複数並んで建立されることの多い地蔵は、マスクを着けることでその視覚性が強調され、手作りのカラフルなマスクや赤いマスク姿の地蔵の写真はSNSにも数多く投稿された。COVID-19の流行によってインターネットを通じて突然拡散されたアマビエとは異なり、マスク地蔵は伝統的な信仰を引き継いだ部分も大きいのが、手芸の技術を生かしてCOVID-19の収束を願った点はアマビエとの共通点も見いだせた。

### 3、疫病の流行と「大仏建立」への期待

#### 3-1 疫病の流行下における大仏への期待

アマビエやマスク地蔵のように直接的に疫病と関わるものではないものの、COVID-19が流行する中で注目されるようになった視覚表象に「大仏」がある。地震や台風など自然災害などが続くと、インターネット上のジョークとして「大仏を建立するしかない」と言われることがあった。さらにCOVID-19が拡大するなかでもSNSなどで「大仏建立」という発言が増えるようになった。このような自然災害や疫病を大仏によって鎮めようとする願いは、おそらく歴史の授業で習った奈良時代に聖武天皇によって発願された東大寺の毘盧遮那仏（奈良の大仏）のイメージを引き継いだものであろう。

そのような背景もあり、COVID-19の不安が広がるなか、奈良の大仏に対する期待が高まった。2020年4月11日からインターネット配信サイト「ニコニコ生放送」において、50日間1200時間、定点カメラで東大寺大仏殿に安置された毘盧遮那仏の姿を移す中継が行われた。大仏の参拝に行きたくても行けない人や、自粛による不安などもありモニター越しに大仏を参拝する人が多くいた。さらに自粛要請中の2020年4月24日、東大寺大仏殿の前に東大寺別当の狭川普文を中心に仏教、神道、キリスト教の宗教者が並ぶ写真が「共に祈ろう」というハッシュタグとともに投稿された。そして東大寺では宗教・宗派を超えて「正午の祈り」を呼びかけた。東大寺の活動は大々的に報道されるだけでなく<sup>50)</sup>、SNSによって共有された。このような活動は奈良の大仏という誰もが知る存在だからこそできた祈りのイメージの拡散であった。

大仏といえば東大寺の印象が圧倒的に強いものの、東大寺以外の大仏についてもいくつかの報道があった。茨城県常陸太田市の子供会の会員がCOVID-19収束の願いを込めて編んだ巨大なわらじを、鎌倉の大仏として知られる神奈川県鎌倉市の高德院へ奉納している<sup>51)</sup>。越前大仏で知られる福井県勝山市の清水寺では「コロナ退散」の願いを込めたお身拭いが僧侶や奉賛会によっておこなわれた<sup>52)</sup>。大阪市天王寺区の藤次寺で

は、開眼されたばかりの約4メートルの不動明王坐像が「コロナ大仏」や「コロナ不動尊」と呼ばれCOVID-19収束の信仰を集めている<sup>53)</sup>。さらに明治時代にスペイン風邪による死者を慰霊するために建立された丹後大仏など、感染症の歴史が見直される中で注目を集めた大仏もあった<sup>54)</sup>。

### 3-2 僧侶兼アーティストによる大仏造立プロジェクト

奈良の大仏の歴史によって疫病のイメージとも結びついた大仏は、COVID-19によるパンデミック下で注目を集めるものとなった。しかし実際に奈良の大仏規模の仏像を新たに造立することになれば、数千万から数億円の予算が必要となる。多くの人々にとって「大仏建立」はジョークだからこそ成立するものでもあった。だがCOVID-19によって実際に大仏を建立しようとする現代美術のグループが登場した。アーティストとしても活動する僧侶の風間天心が所属するアーティストグループ「ジャーマン・スープレックス・エアラインズ」によって、新たに「コロナ大仏」を建立する計画も進められたのである。

風間が中心となって進められているコロナ大仏の建立計画は、現代美術作品としての側面があるため従来の大仏建立とは異なる点が多い。しかし大仏である以上、仏教儀礼や信仰が重要な意味をもつことは従来の大仏とは変わらない。風間によれば、COVID-19が広がるなかで、檀信徒などを守るためとはいえ扉を閉ざしてしまっている寺院が多いことへの憤り、そして感染症が拡大するなかで宗教者にしかできないことをやらねばという思いがあった。風間は仏教にしかできないことがあるのではないかと模索するなかで、かたちにならない恐怖心を包み込み、胸の内に明かりを灯そうとする、壮大な大仏造立プロジェクトを開始したという<sup>55)</sup>。

風間らはクラウドファンディングによって集めた資金をもとに、「勸進キャラバン」と呼ばれる全国各地の寺院を周ることで資金を募った。大勸進キャラバンは風間が彫った高さ80センチほどの大仏の胎内仏を専用のトラックに積み全国を回り、法要をおこなっている。法要では地域の人たちにCOVID-19で受けた不安や願いを紙に書いてもらい、

供養するために胎内仏に貼ってもらった。さらにCOVID-19によって中止となったイベントのチラシやCOVID-19について報道した新聞なども貼ることでCOVID-19による人々の気持ちが込められた胎内仏となった。また法要会場を訪れた人々に大仏を体感してもらうためのVR大仏も用意するなど、新たな試みもおこなわれた。

2020年夏から開始された勸進キャラバンは2021年11月までに全国50ヶ所を周り、その様子は新聞やテレビで報道された<sup>56)</sup>。さらにリアルタイムでインターネット中継され遠隔地からも法要に参加することが可能となった。そして寺院を会場として勸進キャラバンの法要は宗派に関係なくおこなわれ、風間自身が願ったように大仏の建立によって多くの宗教者を巻き込むことへとつながった。願いの書かれた紙を貼られた胎内仏は、COVID-19によって引き起こされた様々な思いを引き受ける対象となり、祈りの場を提供することへとつながった。

### 3-3 参加者の手によって完成する大仏へ

2021年以降、風間らは小さなコンクリート製の仏像に参加者が思いの思いに紙を貼ってオリジナルの仏像を制作するワークショップを開始した。参加者が制作したカラフルな仏像はSNSによって共有がなされている。風間らによる「コロナ大仏」の造立計画は未だ途中段階であり実際に大仏が完成したわけではないが、勸進キャラバンに同行した胎内仏を内部に、外側にはワークショップで制作された小さな仏像を並べた棚の形状をしたアート作品であると同時に人々の願いをこめた造形の集合体としての大仏となる予定だ(図4)。

僧侶兼アーティストが開始した大仏造立プロジェクトは、VR大仏やオンライン法要中継など最先端の技術も取り入れ、参加者の手によってCOVID-19による思いを込めた胎内仏や仏像制作ワークショップなど新しい試みがおこなわれ話題となった。だが、発願者、結縁者、制作者、技術者、宗教者そして信仰者といった多くの人々が力を合わせて作られた点は、本来の大仏造立のあり方と根本的には同じである。さらに参加者の手で大仏に触れることのできる法要やワークショップは、手作業を



図4 コロナ大仏ワークショップの大仏棚（筆者撮影）

おこなうことでCOVID-19流行下の人々の思いを受け止めているという意味ではアマビエやマスク地蔵との共通点も見いだせるであろう。

## まとめにかえて

近代以降の信仰においては接触よりも視覚が優位となったと言われる。本稿でとりあげたアマビエ、マスク地蔵、コロナ大仏においても、SNSやネットニュース・新聞・テレビの報道による視覚表象の共有によって広まった。可愛らしさや色鮮やかさなど、視覚的に映えることが、アマビエ、マスク地蔵、コロナ大仏が拡散される大きな原動力と

なった。特に SNS においては誰もが発信者となれるため自ら作ったものを COVID-19 への気持ちを込めて発信することが可能であった。手作り文化として定着したアマビエだけでなく、自ら縫ったマスクをつけた地蔵、さらにはダンボールで高さ1メートルほどの「大仏」をつくり SNS で発信した家族なども見られた。

他者との接触を控えなければならない時期だからこそ「手作り」の良さが見直され、結果としてオンライン上の画像だけでは飽き足らず、物質としての存在、物質との接触が重視されることになった。アマビエ、マスク地蔵、コロナ大仏はオンラインによるイメージの拡散と手作りの感覚によって定着し、それは既存の宗教団体にも影響を与えた。

未曾有のパンデミック下において COVID-19 と関連付けられた視覚表象の共有は、収束への願いという未来への視点だけでなく、時に過去の歴史を受け継ぐこともおこなわれた。本稿で扱った願いを込めた視覚表象は、ワクチンや薬品のように具体的に感染症を解決するものではないが、長く続くパンデミックにおける様々な不安、言葉にできないような気持ちに寄り添い受け止める重要な存在であったと考えられる。

## 付記

本論文は、2021年～2023年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）「東日本大震災後における仏像の役割—誰もが仏像を作れる時代の信仰のかたち—」（研究代表者・君島彩子、研究課題番号 21J40124）の助成を受けた研究成果の一部である。

## 注

---

- 1) 本稿において SNS と表記した場合、基本的には Twitter と Instagram を参照したものである。なお Twitter については、時期を特定した検索が可能であるが Instagram は時期の特定が難しく、イメージの検索のみをおこなった。

- 2) 現代語訳、東郷隆『病と妖怪——予言獣アマビエの正体』集英社インターナショナル、2021年、13頁
- 3) 長野栄俊「変質するアマビエ——2020年の「疫病退散」から考える」『歴史地理教育』919号、2021年、24～29頁
- 4) 飯倉義之「アマビエはなぜゆるキャラ的にコロナ禍のアイコンとなったのか——予言獣「アマビエ」ブームの観察と考察」『子どもの文化』52巻9号、2020年、2～8頁。  
伊藤龍平「アマビエ考——コロナ禍のなかの流行神」『口承文藝研究』44号、2021年、13～26頁
- 5) 湯本豪一『日本の幻獣図譜—大江戸不思議生物出現録—』東京美術、2016年、32～42頁  
長野栄俊「予言獣アマビエ考——「海彦」をてがかりに」『若越郷土研究』第49巻第2号、2005年、4頁
- 6) 松本玲子「コロナ禍におけるアマビエ考(1) 子ども達との関係から探る受容と変容」『明和学園短期大学紀要』30号、2020年、13～19頁
- 7) 『毎日新聞(山口)』2020年4月23日
- 8) 『下野新聞』2021年2月21日
- 9) 『河北新報』2020年7月6日
- 10) 『岩手日報』2020年7月15日
- 11) 『名寄新聞』2021年4月3日
- 12) マスクを着用した銅像については世界各国でみられた。仏像においてもタイヤインドで報道がなされている。
- 13) 『朝日新聞』2020年5月1日
- 14) 『千葉日報』2020年4月10日
- 15) 『北海道新聞』2020年4月3日、『毎日新聞』2020年4月8日
- 16) 『毎日新聞』2020年4月28日、『西日本新聞』2020年4月28日、『朝日新聞』2020年4月29日、
- 17) 『朝日新聞』2020年4月2日
- 18) 『神戸新聞』2021年7月29日
- 19) 『上毛新聞』2020年4月11日
- 20) 『東奥日報』2020年4月23日
- 21) 『福島民報』2020年5月26日
- 22) 『上毛新聞』2020年4月9日
- 23) 『夕刊三重』2020年4月10日
- 24) 『東奥日報』2020年4月18日、『毎日新聞』2020年5月18日



- 25) 『新潟日報』2020年6月5日
- 26) 『米澤新聞』2021年4月11日
- 27) 『文化時報』2020年4月15日
- 28) 『毎日新聞』2020年5月15日
- 29) 『下野新聞』2020年7月18日、『朝日新聞』2020年7月22日
- 30) 『東濃ニュース』2020年4月26日、『中日新聞』2020年4月27日
- 31) 『北國新聞』2020年4月30日
- 32) 『北國新聞』2020年8月12日
- 33) 『山形新聞』2020年10月26日
- 34) 『上毛新聞』2020年4月29日
- 35) 『福島民報』2020年8月24日
- 36) 『福島民友新聞』2021年08月24日
- 37) 菊地浩平「新ぬいぐるみ学序説——人形参観、マスク地蔵、生きてるみ」『ユリイカ』  
53巻1号、2021年、78～83頁
- 38) 『福島民友新聞』2020年5月30日
- 39) 『埼玉新聞』2020年6月17日
- 40) 『長野日報』2020年6月13日
- 41) 『山梨日日新聞者』2020年12月5日
- 42) 『タウンニュース』2020年5月8日
- 43) 『朝日新聞』2020年8月11日
- 44) 『朝日新聞』2020年12月23日
- 45) 「“鬼滅”の手作り和柄マスク コロナ退散のお守り」『女性自身』2020年9月1日号、  
140～141頁
- 46) 『茨城新聞』2021年1月14日
- 47) 『山陽新聞』2021年3月26日
- 48) 『北國新聞』2020年6月29日
- 49) 『津軽新報』2020年6月26日
- 50) 『週刊仏教タイムス』2020年4月9日、『毎日新聞(奈良)』2020年4月21日、『朝日  
新聞(大阪)』2020年4月24日、『奈良新聞』2020年4月25日、『朝日新聞(東京)』  
2020年4月28日、『中外日報』4月29日、『日刊ゲンダイ』2020年6月19日
- 51) 『茨城新聞』2020年11月12日
- 52) 『日刊県民福井』2020年12月7日
- 53) 『FRIDAY』2021年3月12日号、72頁、『朝日新聞(大阪)』2021年4月7日
- 54) 『朝日新聞(東京)』2020年6月23日

- 55) 筆者は風間氏と面識があり、複数回にわたって大仏建立に関するお話を伺っている。本稿では主に2020年6月19日、2021年1月3日におこなった風間天心氏との対談、2021年9月29日におこなった風間氏へのインタビュー、2020年10月31日に東京都新宿区の駆け込み寺でおこなわれた勸進キャラバンの同行調査、そして新聞記事から大仏建立計画について論じている。
- 56) 『文化時報』2020年6月10日、『読売新聞(東京)』2020年6月28日、『毎日新聞(東京)』2020年8月31日、『週刊仏教タイムス』2020年9月10日、『毎日新聞(大阪)』2020年9月1日、『文化時報』2020年9月12日、『中外日報』2020年9月16日、『十勝毎日新聞』2020年9月18日、『北海道新聞』2020年9月18日、『岩手日報』2020年9月23日、『陸奥新報』2020年9月28日、『福島民報』2020年9月29日、『秋田魁新報』2020年9月30日、『東京新聞』2020年10月1日、『東京新聞』2020年10月4日、『福島民友』2020年10月11日、『NHK BS1』「地球リアル」2020年11月24日、『中外日報』2020年11月25日、『四国新聞』2021年4月7日、『三豊ケーブルテレビ』「コロナ収束を願って大仏造立を目指す勸進キャラバン法要イベント」2021年4月5日。